

3

---

## 日蓮聖人の明らかにした靈魂

---

赤堀 正明

---

日蓮宗現代宗教研究所長  
千葉県常不輕寺住職

---

なぜいま、魂の事が取り上げられるのでしょうか。魂のこもらない政治家の言葉がコロナ禍で苦しむ人の心を逆なでし、若者たちにはいかに気楽に生きられるかが話題の中心であり、かと思うと、二刀流の大谷翔平君の一投一打に感動し、競泳の池江璃花子さんが難病を克服してオリンピックの候補選手になったことに魂を揺さぶられています。グローバル化した社会の中で、魂に触れることを模索して人々は右往左往しているのです。

25歳の頃、一年間京都に遊学して『法華玄義』を学んでいました。ある日、御本尊の表装を頼もうと思い、西陣にある山口表具さんにお伺いしたのですが、ちょうどその日はお母様の四十九日に当たっていて、ご仏壇にお灯明が点っていました。そこでお題目をしばらく唱え、下宿していた京都の古い寺の土蔵に戻りました。

一年後、私は東京の自宅に戻っていたのですが、「私は宇宿允人という指揮者です」と言って、突然名古屋から訪ねて来られ「赤堀さんが私の兄の表具屋に来た時に唱えているお題目を聞いて、お話を聴きに参りました」とおっしゃるのです。宇宿さんは関西でヴィエール・フィルの代表をされていたのですが、事情があって辞任し、単身東京に出て来たのだと話されます。初めは、なぜ音楽家がお題目を聞いて、わざわざ会いに来たのかと思ったのですが、後になってそれが分かりました。

黒柳徹子さんが宇宿さんのCDのジャケットに「私の魂に確かに届いた。ベートーベンがここにある。宇宿先生のやさしい情熱が、私の心を揺さぶるのだ」というコメントを書かれています。銀座の交詢社という社交クラブでモーツァルトの四重奏を演奏した時、N響のバイオリニストが一人来ていました。何小節か演奏が進んだ時に、宇宿さんは床板を足で叩き鳴らして演奏を止めてしまいました。聴衆は何がはじめたのかと置いていたら、バイオリニストを指して「気が抜けた演奏をするなら出て行け、魂を込めて演奏しろ」と叱咤したのです。ベートーベンの『運命』や『第九』を聞くと、はじめの一つの音から他の指揮者の音とは違うのです。

日蓮聖人の明らかにした靈魂は、個的なものということだけではなく、およぼす影響というものも含めて、靈魂と呼ぶべきではないかと考え、はじめに宇宿さんのお話をさせていただきました。

日蓮聖人と靈魂と言いますと、違和感を抱く方もいるかも知れません。日蓮聖人は靈魂という言葉が使われていないのではないかと指摘する方もいると思います。また一方「久遠の生命」という存在を信じる人もいます。このようなものを含めて日蓮聖人の「魂」、ひらがなの「いのち」、それから寿量品の「寿」と書くいのちに

ついて考察を進めます。

日蓮聖人は釈尊の示された業論に立脚し、天台大師の重視された五蘊<sup>※1</sup>を靈魂と見る四有説<sup>※2</sup>を依用されて、その転生のシステムに則っています。四有説の主体となるのは識神とされますが、聖人は多く「精靈」または「聖靈」と呼称されています。

日蓮聖人の理解を軸とする仏教の死後観については、拙著『我々はどこから来たのか 我々は何者なのか 我々はどこへ行くのか —仏教から見た死後の世界—』において明らかにしています。ここで解明したのは、次の点です。

- ① 六道輪廻はバラモンの法であり、仏教では六道の迷界を経めぐるのでなく、六道界を出て四聖界に入るのだが、六道も四聖も共に、心の有り様が変わることによる変化である。
- ② 無記は死後を否定するものでもなく、ましてそれを語らないものでもない。今生（本有）の仏道修行を優先することと、無意味な論争を避けたための説である。
- ③ 釈尊が発得した業論に基づく三世兩重の因果説は、全ての死後説を超過して、その主体となるものは五蘊に比定される。
- ④ 仏教の死後観は観念的・抽象的なものではなく、現実的・具象的なものである。
- ⑤ 釈尊と天台大師および日蓮聖人の死後に関する見解は共通して、会通される。今説では聖人の御遺文を依用することにより、聖人の言葉で四有における五蘊（靈魂）の有り様を浮き彫りにすることを試みます。

## 《日蓮聖人は魂・靈魂をこのように見た》

先、日蓮聖人の魂・靈魂の用例を御遺文に見てまいります。これには三つの用例があります。

一には大事なもの、大切なものとして靈魂を使う場合です。これは表層に対して核心とされるものを示される場合です。「種種御振舞御書」等に、

人に魂なければ死人也。日蓮は日本の人の魂也。（「種種御振舞御書」定遺975頁）

と使われる用例です。

二には、精霊として用いられるもの。「精霊」あるいは「神（たましい）」、「魂」を語を当てられ、識神（五蘊を主導する識蘊）を指して四有の転生システムの主体とされるものです。魂の用例としては「木繪二像開眼之事」には「人死すれば魂去り、其身に鬼神入替て子孫を亡す。」（定遺793頁）がみられ、聖霊の用例としては「報恩抄」と「上野殿御返事」の、

父母も故道善房の聖霊も扶かり給ふらん。（「報恩抄」定遺1239頁）

此の経を御信用あれば、故聖霊いかに草のかげにても喜びおぼすらん。（「上野殿御返事」定遺836頁）

が挙げられます。「内房女房御返事」には内房女房がお父様の百か日の時に読み上げた願文の全文を初頭に挙げて、それに関して日蓮聖人がご意見を述べているものです。これは他に類例のない内容のお手紙ですが、この願文の中に、

幽霊生存の時（略）靈山の界上に亡魂定めて覚蕊を開かん。（「内房女房御返事」定遺1784頁）

とあり「幽霊」「亡魂」という言葉の用例が見られ、ここからは当時、一般では聖霊と「幽霊」と「亡魂」が類義語として使用されていた可能性が推知されます。

三には色心不二の心法として、色法に影響を及ぼす用例があります。「木繪二像開眼之事」に、心法と色法との相関関係を示す論及があります。「四條金吾釈迦仏供養事」には、

第三の国土世間と申すは草木世間なり。（略）此画木に魂魄と申す神を入るる事は法華経の力なり。（「四條金吾釈迦仏供養事」定遺1183頁）

と述べられ、法華経は魂魄の出入を可能にする力を有するとしています。

これは霊として言外の力用を示すものです。霊魂は五蘊であり、業の勢力を併せ持つため、個としてあるだけではなく、個としてあると同時に他にも影響を与えるものだからです。例を示しますと、電球と光です。電球というのは個体です。ところが電球から放たれる光も、電球と一体になって他に影響を与えます。その光によ

って照らされたものは光を反射あるいは光を吸収して、その物体の独自の光をそこから放ちます。ウランガラスという特殊なガラスは、特定の光を与えるとそれを吸収して、しばらくの間、光を宿し放光し続けます。このように聖人は他に影響を与えて、感化した範囲まで含めて靈魂と見ていられたと考えられます。

法華を悟れる智者死骨を供養せば生身即法身。是を即身といふ。さりぬる魂を取り返して死骨に入れて彼魂を変て佛意と成す。成佛是也。即身の二字は色法、成佛の二字は心法。死人の色心を変して無始の妙境妙智と成す。是則即身成佛也。（「木繪二像開眼之事」定遺794頁）

このように三通り（一つのものの働きの三通りと言ってもいいかも知れませんが）の、魂の用例がみられます。これは魂が個体であると同時に境界が無く、灯りのように周囲に広がりを持つものであり、また法華経を心得た信行者には可変、移動も可能とされているのです。

## 《死後は所業に応じて行き先が決まるのです》

仏説に従えば、識神（魂）は自由にどこかに行けるわけでもなく、神仏が死後の行く先を決めるのでもなく、その人の行った業によって赴く先が自ずと決定されます。『俱舍論』には中有がないという説もありますが、なるほど中有がなくても本有の時に既に業果は定まっていて、定業不改の原則により順次生に赴くのです。日蓮聖人は中有を存在するものとされていますが、死有と中有の区別を厳密にはされてはいないようです。所業に応じた形態を取ることは、『法華経』の「譬喩品」に説かれる通りです。しかしその一方「可延定業御書」には定業である寿命を延べたことに触れています。

業に二あり。一には定業、二には不定業。定業すら能々懺悔すれば必消滅す。何かに況や不定業をや。（略）不輕菩薩は更増寿命ととかれて、法華経を行じて定業をのべ給ひき。（略）されば日蓮悲母をいのりて候ひしかば、現身に病をいやすのみならず、四箇年の寿命をのべたり。（「可延定業御書」定遺861頁）

ここには定業を変え得ることについて述べられています。法華經を行ずることによって、不可能とされる定業を転じ、定業能転が可能であるとされているのです。「四條金吾殿御返事」には、

人の命は山海空市まぬかれがたき事と定て候へども、又定業亦能転の經文もあり。又天台の御積にも定業をのぶる積もあり。（「四條金吾殿御返事」定遺1258頁）

と述べられ、『摩訶止観』の「仮令、衆障峯起すとも、当に死を推して命にしたがふべし。捨心決定すれば何の罪か滅せざらん。何の業か転ぜざらん」の文に依り、命懸けの心を持てば定業も転じるとされています。「転重軽受法門」には不輕菩薩の古例を挙げられて、

難に値ゆへに、過去の罪の滅するかとみへはんべり（「転重軽受法門」定遺507頁）

法華色読の受難により、過去の重罪も消滅し、定業能転により成仏が可能となるとされるのです。「佐渡御書」には龍口法難を指して、

我今度の御勘気は世間の失一分もなし。偏に先業の重罪を今生に消して、後生の三悪を脱れんずるなるべし。（「佐渡御書」定遺614頁）

と御自身の身に当てて示されています。

## 《魂の目的は一仏乘にあります》

「太田入道殿御返事」に、

それおもんみれば、一乗妙經は三聖の金言、已今当の明珠、諸經の頂に居す。（「太田入道殿御返事」定遺1117頁）

とあります。法華經を「一乗妙法蓮華經」と言うのには、二つの意味が考えられま

す。

一つ目は「三車火宅」の譬えにありますように、二乗も菩薩も同じ一仏乗という乗り物に乗るということで、これは全ての人には仏に成ることを、仏教の目的であるとするものです。

二つ目は全ての人には仏に成るために生まれ、生きているのであり、すべての道は仏道に通じるという考え方です。九界を経めぐり、このことに気付いた即時に仏道に入るのです。魂の目的は自覚してもしなくても、仏道を歩むことにあります。仏教では教え（乗）も一つであり、人の目的も一つであることを明かす事を一仏乗とされています。魂も亦、転生し続けながら仏と成ることを目指しているのです。ここまでは魂の概念について触れてきましたが、次に魂の具体的様相について述べてまいります。

## 《臨終正念によって死後、何処に往くかが決定します》

「妙法尼御前御返事」に、

人の寿命は無常也。(略) されば先臨終の事を習ふて後に他事を習ふべし (「妙法尼御前御返事」定遺1535頁)

とあるように、日蓮聖人は臨終の事をまず習え、と世間の諸事に先駆けて（息諸後務）臨終を習学する大切さを述べられます。臨終を習うとは先、死を学び、死後を学び、生を習うことにあります。臨終は人生のすべての総決算の時なのです。

臨終正念と祈念し給へ。(「生死一大事血脈鈔」定遺524頁)

臨終の時、一つの念いに心を定めるのは病苦の中、そう簡単ではないのです。だから正しく念じられるように祈るのです。さらに日蓮聖人は、「如説修行鈔」には、

唱へ死にに死ぬるならば (「如説修行鈔」定遺737頁)

とあり、「上野殿御消息」に、

相構て相構て、心を翻へさず一筋に信じ給ふならば、現世安穩後生善処なるべし。（「上野殿御消息」定遺1127頁）

とあるように、何よりも、一心の決意が、信心に求められます。

たゞ一つきて候衣を法華經に（「事理供養御書」定遺1262頁）

と示されて、自らの一番大切にするものすら布施するという志が必要とされます。「大白牛車書」にも

ただ信心のくさび（轄）に志のあぶら（膏）をささせ給ひて（「大白牛車書」定遺1412頁）

とあり、臨終には信心と、信心を更に進め深める志という更なる正念を満たす条件が特記されています。

私が大阪にいた頃に、笠原法尼という大勢の人を導いた尼僧さんがおられました。法尼の妙誠結社には鹿糠堯順上人や竹内祥起上人など、若いお坊さんがご飯をご馳走になり、お話を聞かせていただいていたいました。ある時、法尼が「赤堀君、私はこれまでに亡くなる人をどれだけ見てきたか分からないけれど、臨終正念するには三つ条件があるように感じるよ。一つはね満足しなきゃダメだよ」とおっしゃる。私は何で満足ということを使うのだろうかと思っていますと、「生きてる時にね、生きてることに喜びを感じない人間は臨終正念しないんだよ。どんなに教えが分かっているよとね、信念があつたってね、満足しない者はダメだ」とおっしゃるので。続けて「二つ目には他人のために何かしなければダメだよ。人のために何かしようという気持ちのない者は臨終正念していない」と言われたのです。芥川龍之介の蜘蛛の糸にあるように、蜘蛛一匹の命さえ救うことも実は稀であります。心から人のためにするという事は、なかなか簡単なことではないと、その時にも教えられました。さらに「三つ目は、当然法華經の信仰だよ」と言われ、私もなぜかほっといたしました。



## 《臨終の相貌には違いがあり、その違いにより死後の行き先は判断されます》

ここから死後の様相に触れてまいります。日蓮聖人が幼少時の疑問の一つに、念仏者の臨終相がありました。浄土門では臨終行儀で、弥陀来迎図を枕頭に掛け、阿弥陀仏の指と自分の指を結び、日蓮聖人の御遺文にも載せられています。

日蓮聖人の大曼荼羅も、ご自身の臨終時に日朗上人授与の大曼荼羅を枕頭に掛けられたとの用例から鑑みて、臨終行儀の時にも用いられ、赴くべき浄土を示されたとも考えられます。『チベットの死者の書』にも臨終の時に、死後の世界の案内を聞かせる行儀が載せられています。

次に、日蓮聖人の臨終相についての言及が「千日尼御前御返事」にあります。

人は臨終の時、地獄に墮つる者は黒色となる上、其身重き事千引の石の如し。善人は設ひ七尺八尺の女人なれども色黒き者なれども、臨終に色変じて白色となる。又軽き事鷲毛の如し、軟なる事兜羅綿の如し。（「千日尼御前御返事」定遺1599頁）

善人は白く軽く柔らかい、悪人は黒く重く硬い、と見られています。「妙法尼御前御返事」「報恩抄」「神国王御書」等にも挙げられています。これは日蓮聖人の一念三千の理解の上で、

十如是の始の相如是が第一の大事にて候（「撰時抄」定遺1054頁）

と示されるように、現実に見られる可見有対色の相が、末法においては重要な位置付けにあり、故人の肉心は外相に表われ、来世を示すとされているのです。

## 《死出の旅はただ一人往かねばなりません》

これからはいよいよ死の世界に入ります。「松野殿御返事」にこうあります。

人皆此無常を遁れず、終に一度は黄泉の旅に趣くべし。（略）彼冥途の旅には伴なふ事なし。冥冥として独り行。誰か来て是非を訪はんや。（「松野殿御返

真偽未決遺文の「十王讚歎鈔」にも、死出の旅の経緯についてはよくまとめられています。「松野殿御返事」には、人は亡くなってから両親や子供と別れて暗き道を独り行くことの切なさが語られています。

或年の冬、私は龍口寺に居候させてもらったことがあります。その時に七面堂の堂守りをされている老僧がおられ、一日、数人の僧が炬燵にあたりながら雑談をしていました。老僧は不思議な方で、山門を入れて歩いてくる親子らしき女性の二人連れを見て「おいみんな、あの二人は何をしに来たか分かるかい」と聞くのです。老僧は白髪の長い髭をなぜながら「あの娘の縁談の相談で来たんだが、相手はろくな男じゃないから、あれは駄目じゃ」と、話す前に相談の内容、その結果までも推知してみんなの前で話してくれたのです。

その老僧が「実は私は一回死にそうになったのだ」と言うのです。龍口寺の七面堂に行くには石の階段をかなり登らなければならないのですが、その階段の途中から転げ落ち頭を打って、臨死の状態に入ったのです（臨終というのは死の三徴候プラス心電図の停止ですが、それが揃っても蘇生する人がいることが報告されています）。老僧は納棺され、お通夜をしている最中、お棺の中で息を吹き返したのです。その間の体験が、「松野殿御返事」に書かれているように、暗い細い道を独り歩いて往くと、後ろの道は消えて、歩く前だけがほのかに明るかったと話されました。

この老僧は日蓮宗の僧侶になる経緯も変わっていて、元は禅宗で次に真言宗、そして三度目に身延の増田宣輪上人の弟子となり日蓮宗の僧侶になった方なのです。様々な修行もしてこられたそうです。それで自分の死んだ行き先は兜率の内院（お釈迦様のお母様の摩耶夫人がそこにいらっしゃったという浄土の一つ）に行くつもりで歩いて行ったそうです。すると向こうから鬼が来て「お前はどこに行くのだ」と聞く。「私は兜率の内院にこれから参ります」と言うと、鬼は「お前はそこには行けない。お前が往く先はもっと下の三悪道だ」と言って、その道の遥か下の暗闇を指さしたそうです。老僧は「私は、そこに行きたくないが、どうしたらいいのか」と問うと、「まだやりたいことがあるというのなら、元に戻してやる」と鬼は言います。老僧も三悪道に落ちるのはかなわないと思い「もう一度やり直す」と言った瞬間に棺桶の中で息を吹き返し、その後は虚飾の無い生活を心懸けられたそうです。

これは当人から聞いた話で、家族も知っている事でしたので、真実であろうと思われま。実はこの中で述べられているのが、上品・中品・下品とある中品の死有の話であります。上品というのは御遺文にありますように、仏菩薩の来迎を受けま。下品は直ちに三悪道に落ちると、日蓮聖人の記述があります。中品では暗き道を歩いていくと示されています。法華經受持者は、所業により中品あるいは上品の死有に赴くことが分かります。

## 《三途の河から先は世間体が通用しません》

生と死の一線を画するのは三途の河で、現世である此岸と、いわゆるあの世、彼岸を分ける境目にあります。欧米の臨死体験者の報告では、牧場の柵や草原の小屋などが挙げられていますが、日本人の報告では河が多いようです。その河は故人の生前の業によって、その姿を変え、河の渡岸の難易が変化します。河が小川になったり、大河になったり、あるいはせせらぎになったり、激流になったり可変するのです。善人は橋を渡ることができるのですが、これは有橋渡と言われます。軽い罪人は浅瀬を渡り、重罪人は急流の深みを渡ることになります。三途の河の出典は『金光明經』の「この經、よく地獄餓鬼畜生の諸河をして焦乾枯渴せしむ」にあり、河の水が熱くなったり、乾いたり、濁ったり変化すると記述が根拠とされています。それ以降に中国で成立された『十王經』に、より詳細に述べられるようになります。日蓮聖人は「波木井殿御書」に、

三途河にては船となり、死出の山にては大白牛車となり、冥途にては燈となり、靈山へ參る橋也。（「波木井殿御書」定遺1932頁）

と述べられるように、法華經受持の功德は中有の世界に渡る河では船や橋など、その人を助ける形に変化するとされています。

## 《奪衣婆・懸衣翁が河岸で着物を剥ぎ取る訳は、死後に人の真実の姿が明らかになるからです》

奪衣婆は三途の河の辺で亡者の衣服を剥ぎ取り、懸衣翁が衣領樹に掛け、その重さで罪の軽重を測るとされています。これは表徴的な用法で、衣は現世で生きていた時の表向きの顔であり、その衣を剥ぎ取った時に亡者の真の姿が曝け出されるの

です。全ての虚飾を脱ぎ捨てて中有の世界に行かなくてはならない、というのがこの奪衣婆等の存在の本意なのです。これは物語として作られたものではなく、中有に行くには世間的な虚飾・地位・名誉、そうした粉飾が全く意味をなさないということを知っていると諒解するのが至当なのです。『チベットの死者の書』にも類似の記述があります。日蓮聖人は、

獄卒だつえば（奪衣婆）・懸衣翁が三途河のはた（端）にて、いしやう（衣装）をはがん時を思食して、法華経の道場へまいり給べし。法華経は後生のはぢをかかす衣也。（「寂日房御書」定遺1670頁）

「衣装を剥がん時を思食して」とは正に人の真価が問われる時を指しています。又、奪衣に懸けて、法華経修行の功德は亡者の恥ずべき罪を覆隠する功德があるとされています。

## 《死出の旅には突然の事故も起こるようです》

上野殿母尼にお与えになったお手紙です。

事故なく靈山浄土へ参らせ給ふべき（「上野殿母尼御前御返事」定遺1811頁）

事故なくというのは、交通事故の事故と書きますが「ことゆえ」と読みます。また「獄卒来りて」（「善無畏鈔」）ともあります。死後、何事もなく靈山に参れるばかりではないようです。

故南條五郎殿の死出の山三途の河を越し給はん時、煩惱の山賊・罪業の海賊を静めて、事故なく靈山浄土へ参らせ給ふべき御供の兵者は、無量義経の四十余年未顕真実の文ぞかし。（「上野殿母尼御前御返事」定遺1811頁）

と、法華経の開経である無量義経の経文が兵者となって南條殿を守り、事故なく靈山浄土に導くとされています。事故も信仰・善業によって無事故となるのです。

亡くなった時にどのようなことがあるかは、日蓮聖人は具体的に「獄卒来りて」（「善無畏鈔」）との言葉もあり死出の旅の途中に何事かが起きる可能性に幾度か言

及されています。長崎県島原市・護国寺の三十番神の由来に注目すべき所伝があります。

松平家三代忠侷（ただみ）は、島原藩主に任命された翌年に原因不明の大病にかかり、一時は危篤状態になりましたが、翌日快復しました。島原市の広報に載っている縁起では「危篤」とありますが、実は臨死あるいは死有状態に入ったということです。そして心配して集まった家臣たちに、昨夜見た夢の話をしました。「いつの間にか立派な御殿の前に来ていて、そこには衣冠を正した三十人がずらりと並んでいました。御殿に入ろうとすると、お前は駄目だ、ここは市兵衛のような誠実で信仰厚い人の来る所だと追い返された」。忠侷は早速その市兵衛という人物を手分けして探させると、熱心な日蓮宗の信者であり、人々の信用も厚い讃岐屋市兵衛という男が見つかったのです。市兵衛を城に呼び尋ねてみれば、祖父と父の代からの遺言である三十番神献納を願っており、それならばと忠侷は市兵衛を藩士待遇として木村一郎左衛門と名乗らせ、京都に派遣し、名のある仏師三十人に一人一休ずつ番神像を彫らせたというのです。それと同時に七万巻の『法華経』を印刷しました。通常、一部八巻のお経文でお経箱一つになるものですが、それを京都において一部一巻の細字の木版印刷をして、七万巻という途方もない数の『法華経』を奉納したのです。

現在でも番神堂の天袋と須弥壇下の棚一面に『法華経』の版本が格護されています。この事は島原市の歴史として伝わっていることであり、作り話で三十番神堂を作り、七万巻の『法華経』を印刷製本するということはあり得ない出来事で、事実の伝承であると考えられます。これも忠侷がまだ死ぬ時ではなくて、やるべきことがあり、そのことをなした後でなければ靈山浄土に行けないということを教えられた、一つの事故（ことゆえ）として捉えられます。

## 《法華経誹謗の罪は地獄で閻魔王の責めにあいます》

次に事故なく三途河を渡ると閻魔王等に尋問されることになります。これは「報恩抄」に述べられており、「下山御消息」にも、

善無畏三蔵は閻魔王のせめにあづかるのみならず、又無間地獄に墮ちぬ。（「下山御消息」定遺1340頁）

とあります。善無畏三蔵は法華経を大日経より劣るとした真言僧ですが、ここで面白いのは、その後に日蓮聖人が、

汝等此事疑ひあらば眼前に閻魔堂の画を見よ（「下山御消息」定遺1340頁）

と示されているところです。鎌倉に円応寺閻魔堂が現存しており、そこに罪人が閻魔に七重に縛られた絵があったようで、おそらくそれを指されたのではないかと思われます。

## 《日蓮聖人は通塞の道案内をして下さいます》

日蓮聖人はこうした死出の旅の、臨終から死有を経て、中有の浄土に至るまでの、導師、案内者を自認されています。「弥源太殿御返事」には、その全体像が示されています。

南無妙法蓮華経は死出の山にてはつえはしらとなり給へ。釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は手を取り給ふべし。日蓮さきに立ち候はば、御迎ひにまいり候事もやあらんずらん。又さきに行かせ給はば、日蓮必ず閻魔法王にも委く申すべく候。此事少しもそら事あるべからず。日蓮法華経の文の如くならば通塞の案内者なり。（「弥源太殿御返事」定遺806頁）

この「通塞」というのは、通ると塞ぐという意味で、中有を指していると思われます。生死界と理解する場合があります。ともかくも、前途が開けるか閉ざされるか不明な異界への案内人を自認されているのです。

## 《丑寅の刻(きざみ)・廊(わたりどの)は生から死への通路》

死後に通過するとされる良の廊について、触れておきます。日蓮聖人は弘安5年(1282)、最後の年に波木井実長公に、通常仏教では触れることのない良の廊という位置について述べられています。

靈山へましまして良の廊にて尋ねさせ給へ、必ず待ち奉るべく候。（「波木井殿御書」定遺1932頁）



と、靈山での再会を約束されています。ここで言われる「艮の廊」とはいかなるところなのでしょう。先の「通塞」と類義語とも考えられますが、艮の廊とは、本有（この世）と死有（あの世）という生死の通路として位置づけられます。通途の解釈では、丑寅は時刻であって空間ではありません。午前3時頃ですが。死有の瞬間から以後は、日常の時空の概念を超えるわけですから、同次元と見ても差し支えはないのです。

日蓮聖人は釈尊を靈鷲山から艮にあたるクシナガラで示寂されたと見、自らも身延から艮にあたる池上で示寂されたことから推察すると、この艮の方角は死との深いつながりがあるものとして領解すべきです。日蓮聖人は、

三世の諸仏の成道は、ねうし（子丑）のをわり、とらのきざみ（寅刻）の成道也。仏法の住处鬼門の方に三国ともにたつなり。（「上野殿御返事」定遺1637頁）

と述べられ、生死の通路というだけでなく、諸仏の成道に関わる重要性に論究されているのです。龍ノ口法難の時刻も、丑寅の刻であり、人としての真実が明らかになる時であり、所でもあると捉えるべきかも知れません。また興門派では「丑寅勤行」と称して、広宣流布を祈願していることも付け加えておきます。

## 《靈山浄土とは、どんな所でしょう》

ここから死有を経過して、霊魂（五蘊）は中有に入ります。その中有の諸相について述べます。法華經受持者の赴く靈山浄土の様相については、日蓮聖人は二通りの解釈を示されています。一つは虚空会の「多宝塔中」で、「千日尼御返事」に述べられています。

故阿仏房の聖霊は今いづくむにかをはずらんと人は疑ふとも、法華經の明鏡をもつて其の影をうかべて候へば、靈鷲山の山の中に多宝仏の宝塔の内に、東むきにをはずと日蓮は見まいらせて候。（「千日尼御返事」定遺1761頁）

これが一つ目の釈義の靈山往詣の場所です。「宝塔の内に、東むきに」というのが問題にされるところですが、大曼荼羅は西面しているというところから、宝塔に

向かい東向きということになります。ただ実際には大曼荼羅は、立体構成のものを平面で表されているため、四天王の配置が45度ずれることになってしまいます。なおこれは日蓮聖人が意図的にされたとも考えられます。私見ですが、日蓮聖人の大曼荼羅の配置では東北が上です。東北を背に宝塔が立っている形になります。そうしますと東北は今まで話してきた艮に当たり、靈山浄土の入り口ということになります。この認識の上に、あえて45度ずらした形で、四天王を配置されたのではとも考えられます。

二つ目に「寂光の宝刹」です。「如説修行鈔」「最蓮房御返事」「松野殿御返事」などに述べられています。「如説修行鈔」には、

慥かに寂光の宝刹へ送り給ふべき也。（「如説修行鈔」定遺738頁）

「最蓮房御返事」には、

我等が居住して修行一乗之処は何れの処にても候へ、可為常寂光都。我等が弟子檀那とならん人は不行一步見天竺靈山本有の寂光土へ昼夜に往復し（「最蓮房御返事」定遺624頁）

とあります。娑婆即寂光の「法華の妙理」（「最蓮房御返事」）により、法華経の行者は生きている時（本有）から常に寂光土に行き来しているのだという聖人の内証から発せられたお言葉です。二つ目の釈義は「松野殿御返事」に

妙覺の山に走り登り四方を御覽ぜよ。法界は寂光土にして瑠璃を以て地とし、金繩を以て八の道をさかひ、天より四種の花ふり、虚空に音楽聞え、諸仏菩薩は皆常樂我浄の風にそよめき給へば、我等も必ず其数に列ならん。（「松野殿御返事」定遺1389頁）

と非常に細密な描写をされています。これは『法華経』の「五百弟子受記品」の記載と共通するところです。両釈義共に法華経虚空会の相を示されたもので、法華経説法の靈鷲山を浄土とされているのは、釈尊の私が法華経を説く、此の所は浄土である「我此土安穩」とのお考えからです。日蓮聖人はその教旨に立って、身延山を靈山とされたのです。「波木井殿御書」には、



我此山は天竺の靈山にも勝れ、日域の比叡山にも勝れたり。然れば吹く風も、ゆるぐ木草も、流るる水の音までも、此山には妙法の五字を唱へずと云ことなし。日蓮が弟子檀那等は此山を本として参るべし。此則靈山の契也。（「波木井殿御書」定遺1931頁）

とあり、法華經を受持する日蓮聖人の魂の居所が靈山浄土であり、印度の靈鷲山ではなく、中国の天台山でもなく、日本の身延山久遠寺に参詣することに靈山への契があることを生涯最後のお手紙に記されたのです。

## 《生死の縛を離れなければ、いかなる人でも中有に漂うことになりす》

次に法華經を受持しなかった人の往く先です。

「本尊問答抄」に、

故道善御房は師匠にておはしまししかども（略）臨終にはいかにやおはしけむ。おぼつかなし。地獄まではよもおはせじ。又生死をはなるゝ事はあるべしともおぼへず。中有にやただよひましますらむとなげかし。（「本尊問答抄」定遺1585頁）

との記載があります。中有の世界での在所は所業によって決定するのですが、本人は自らの所業を熟知してはいません。死後に行きたい所と、行くべき所が異なれば、迷い漂うことになるのです。出家の師僧に対しても、法華經の信仰が無ければ中有に漂っていると説明されていることは、深く心しなければならぬところです。

## 《死は喜びでもあるのです》

死は悲しむべきものとされていますが、聖人は法華經を受持した者は、死後、中有に赴くことは喜びであるとされ「松野殿御返事」（定遺1273頁）には靈山浄土の喜びこそが実の喜びとされています。「妙心尼御前御返事」にはその実景を映すように詳細な記述が見られます。

ただいまに靈山にまいらせ給なば、日いでて十方をみるがごとくうれしく、とくしに（死）ぬるものかなと、うちよろこび給候はんずらん。中有の道にいか

なる事もいできたり候はば、日蓮がでし（弟子）也となのらせ給へ。（略）いかなる悪鬼等なりとも、よもしらぬよしは申さじとおぼすべし。（「妙心尼御前御返事」定遺1104頁）

仏教では本有（娑婆）での修行によって仏道を成じるとというのが当然ですが、日蓮聖人は更に、靈山において真実が明らかにされることにより、素晴らしい喜びに満ちた世界を目の当たりにすると述べられています。

## 《同じ信仰をする人は同じ処に往詣することができます》

最近檀家になったご婦人が、お墓にお花を手向けながら「亡くなった主人にお花をお供えしても、どこにいるかも分からないし、生まれ変わっていたらもう会えないんですね。寂しいですね」と話されたのです。そのお答えが「上野殿御返事」にあります。

此法華経は他経にもすぐれさせ給へば、多宝仏も証明し（略）此経を持つ人々は他人なれども同じ靈山へまいりあはせ給ふ也。いかにいはんや故聖霊も殿も同く法華経を信じさせ給へば、同じところに生れさせ給ふべし。（「上野殿御返事」定遺836頁）

「国府尼御前御書」に、

後生には靈山浄土にまいりあひまいらせん。（「国府尼御前御書」定遺1064頁）

「光日上人御返事」には、

俱に靈山浄土へ参り合はせ給はん事、疑ひなかるべし。（「光日上人御返事」定遺1879頁）

このように同信の者は同処に往詣するというお諭しがあります。この根拠となるのは、同業の者は同処に集まる特性にあります。野球ファンは野球場に競馬好きは競馬場に集まるのです。逆に親しい間柄でも、行いが大きく異なれば、同処に往生

することは無いことになります。

日蓮臨終一分も疑いなし。剎頭の時はことに喜悅あるべく候。(略) 日蓮法華經の行者たる事疑いなきか。(略) ただ生涯もとより思い切つて候。(略) 万事靈山浄土を期す。(「富木殿御返事」定遺619頁)

「期」という字は「契る」とか「約束する」、「一定の時を決める」あるいは「願う」などの意味があります。日蓮聖人は「私は臨終に一分の疑いもありません。命終わって後、いつにても約束された真実の世界である靈山浄土に参ります。そこでお会いしましょう」と無二の理解者である富木殿に、危急の中の文永9年(1272)4月、自らの信仰の所念を認められています。

## 《先に靈山浄土に往詣した人は、後から来る人を導くことができます》

「開目抄」に、

多生曠劫にしたしみし妻子には心とはなれしか。仏道のためにはなれしか。いつ(何時)も同じわかれなるべし。我法華經の信心をやぶらずして、靈山にまゐりて返てみちびけかし。(「開目抄」定遺605頁)

と述べられています。靈山に往詣して後、靈山からどのように導くのかという例は御遺文中、他にはないようです。

これは前拙著にも記載したのですが、長崎のE上人の師父の一周忌の時の話です。一周忌の前日の晩に、師父が夢に現れて「おい、起きろ」と、E上人を起こしたのです。すでに師父は亡くなっているわけですから「お父さんどうしたんだ」と聞くと(これは死有・中有の状態の時というのは、通常の世界から異空間に入り、疑念はなくなるようです)、師父は「私は祈禱師として生きたけれども、お前に言い忘れていたことがあって、今からそれをお前に教えるからついておいで」と本堂に導いて、前机と、御宝前の間に座ったのだそうです。すると目の前に大きな水晶のような珠が現れ、その珠を見ていると、水晶の珠を通して翌日の一周忌にお願いした導師と式衆が居並んで、参加している檀家の方々も見えたのです。「お父さん、こ

れは明日の一周忌に呼んだ人たちだ」と言うと、師父が「そうだ。明日あることを今お前に見せているのだ」と言う。よく見てみますと式衆の中には鼻くそをほじっている者もいる、そっぽを向いている者もいる、そうかと思うと真剣な眼差しでお経を読んでいる者もいます。「お父さんこれは何をやっているんだ」と問うと、「この珠を通すと真実が見える。今あそこにいる人達はそれぞれ縁があって来ている人だけれども、それぞれの考えも志も違っている。そのことが実は死後には明らかになる。それを、今お前に見せているのだ」と教えたのです。E上人は「不思議なことだな」と感じた瞬間に眠りに落ちてしまったそうです。これは師父が、靈山から息子のE上人に真実を知らせ、善導したという、私の知る数少ない話の一つです。

## 《生前の功德は様々な姿を取って死後の世界での助けとなります》

「弥源太殿御返事」に

ぜに（錢）と云ものは用にしたがつて変ずるなり。法華経も亦復是の如し。  
（略）或は水ともなり、或は火ともなり給ふなり。（「弥源太殿御返事」定遺807頁）

お金が様々なものを購入することで、その形を変えることに譬え法華経の功德も様々に変化し助けとなることを示されています。また「単衣鈔」には、

此衣を給て候ば、夫妻二人ともに此仏御尋坐して、我檀那也と守らせ給ふらん。  
（略）御臨終の時は月となり、日となり、道となり、橋となり、父となり、母となり、牛馬となり、輿となり、車となり、蓮華となり、山となり、二人を靈山浄土へ迎へ取りまいらせ給べし。（「単衣鈔」定遺1107頁）

衣一領を日蓮聖人にご供養した功德は、衣が靈山への道や橋になったり、車になったり、供養の功德は変化して、靈山往詣への手助けとなるのです。夫婦仲良く靈山へ詣でるとは、なんと微笑ましく嬉しいことでしょう。

## 《忌日・年忌追善は亡き人にとって、とても大切なものです》

ここからは、故人に対しての追善に関する御遺文です。

忌日・年忌の供養は日蓮聖人の元に度々届けられて、それに対するご返事は丁寧で、やさしさに溢れています。「千日尼御前御返事」には、

尼が父の十三年は来る八月十一日。又云くぜに一貫もん等云云。あまりの御心ざしの切に候へば、ありえて御はしますに随がひて法華経十巻をくりまいらせ候。(「千日尼御前御返事」定遺1546頁)

この御書は「女人の成仏をさきとする」という名言で有名なお手紙ですが、夫の阿仏房は佐渡から三度身延を訪れ、その妻は佐渡で日蓮聖人に対して千日におよぶご給仕をされています。日蓮聖人にとって佐渡からお帰りになる時に最も離れがたいご信徒だったと思われます。書簡中、「日蓮がこいしくをはせん時は」との慕情に心を打たれます。『法華経』十巻を贈られるというのは、どれほど阿仏房、千日尼に対して感謝されていたか、日蓮聖人の心情が窺われます。

### 《追善の功德はどこまでも精霊を訪ねて善き道へと導きます》

「法蓮鈔」には、

いかなる処にも過去聖霊のおはすらん処まで尋ね行き給ひて、彼聖霊に語り給ふらん。(「法蓮鈔」定遺951頁)

法蓮法師の法華経・自我偈読誦の功德が、何処に父親の精霊が居ても尋ねて行って、善知識となり仏道に導くことが語られています。法蓮とは曾谷教信殿の法名です。

法蓮法師は毎朝口より金色文字を出現す。此文字の数は五百十字也。一一の文字変じて日輪となり、日輪変じて釈迦如来となり、大光明を放て大地をつきとをし、三悪道無間大城を照し(「法蓮鈔」定遺950頁)

ともあり、自我偈読誦の功德の甚大を示し、その功德は中有にも及ぶことを明されています。

## 《法華經を悟る人の引導は、死者の身に魂を取り返して、成仏に導くことができます》

靈魂成仏の根幹について「木繪二像開眼之事」に書き出されています。

法華を悟れる智者死骨を供養せば生身即法身。是を即身といふ。さりぬる魂を取り返して死骨に入れて彼魂を変て佛意と成す。成佛是也。（「木繪二像開眼之事」定遺794頁）

このことが可能な人というのは色心不二を心得た智者とされます。色心不二を心得ていれば、死身に一度去った魂を戻して、妙境妙智として供養し、成仏させることができるとの御妙判です。死を妙境とし、生を妙智とし、生死即涅槃を悟ることによって色心不二を心得えた智者となるとされますが、妙境妙智による色心不二の体得は観法であり、名字即の行者には不可能であります。日蓮聖人の教示は次のようになります。

日蓮聖人の法華經色読は、四ケ度の法難によって、色心不二を現象として人々の前に展開されました。この現証を私たちは目で見ることによって、色心不二を信じ体得することができるのです。実に死者の成仏を始めとし、年回・忌日の供養もこの心得があって、初めて可能とされるのです。このことからすると、法華經への信とされるものも、漠然としたものではなく、日蓮聖人によって実証され、実語とされた妙法蓮華經五字七字を信受するということになります。追善成仏の根幹ともいふべき教義です。

## 《久遠実成は靈魂の無上のあり方です》

最後に久遠実成について述べます。『法華經』あるいは「寿命品」を指して「永遠の命を説いた仏典『法華經』」と呼称する人が多いようです。しかしここで問題があります。永遠の命とは、永遠に生き続けることなのでしょうか。それともそうした願いなのでしょうか。そもそも仏教では、人は死んだら無くなるとする断見とともに、人はいつまでも生きていくとする常見を偏った考え方として否定しています。また時間の概念からしても、不可逆の時間を前提に、順行する時間を永遠というのか、そこに可逆できる時間も含むのか。あるいは観念として一瞬即永遠という

ことなのか、全仏教のみならず、全人類の眼目である寿量品は何を語っているのでしょうか。

それは「久遠実成」の四文字に込められていると考えます。久遠実成は寿量品の「我実に成仏してより已来無量無辺百千万億那由他劫なり」を略した語で、その解釈は法身の久遠とともに報応二身の久遠を実修実証を伴う古仏であると明かすことです。

「本尊抄」に、

我等が己心の釈尊、五百塵点、乃至、所顕の三身にして無始の古仏なり。（「如来滅後五百歳始観心本尊抄」定遺712頁）

とありますが、三身の無始無終は初めからどこかに存在していたのではなく、釈尊が五百億塵点劫の初め、成道した刹那に発得したもののなのです。実際に菩薩道を修行し、実際に仏果を証得されたのです。『法華玄義』には、「因は久遠の実修を窮め、果は久遠の実証を窮む」とあり、これを受けて日蓮聖人は、

久遠実成実修実証の仏（「一代五時鷄図」定遺2342頁）

と「一代五時鷄図」に述べられています。

それではなぜ無始無終になることができたのかということでもあります。これは天台大師の『法華玄義』に示される三種教相に説かれています。三種教相は、初めに実相を説き、次に過去世からの化導を説いても、まだ釈尊と私は異なると考える弟子たちのために、師と弟子は同体であることを、師弟の遠近不遠近の相で示されるのです。通途の見解では、日蓮聖人は第三の教相と言いながら、実は第二の化導の始終不始終の相、仏種下種が中心で成仏を論じることが多いようです。しかし「本尊抄」を読むならば、そこでは問題は解決しないのであって、師弟の不遠近「所化以同体」（定遺712頁）において、師と弟子の成仏が確定するのであります。天台大師の三種教相の第三の師弟の不遠近というのは、師と弟子が時間をおいて成道するのではなく、同時に成道することによってのみ、初めてその差がなくなることを教唆しているのです。それ故、師と弟子は互いに主となり伴となることも可能となります。時間を経て仏に成ることと、即身成仏ということを考えて時、時間を経て



成仏すると言うならば、久遠の時間をかけてしか仏に成れないことになります。追えば追うほど師は遠ざかるのです。七仏を超え、三千塵点劫の昔仏を立てた時点で、実は全ての仏の統合はなされています。その上になぜ五百億塵点劫の寿量品を立てたのかというところに、もう一度心を向けることが重要なのです。

このことを示唆したのは提婆品です。提婆品の関連する箇所を見てまいります。釈尊が語るには「私は過去無量劫の昔、王であった時、法華經の教えを求め、国位を捨てて、命をも惜しまず修行していました。その時に阿私仙が来て、私の言う通りにすればあなたのために妙法を説くと言います。王は仙人に随って、食を設け、住まいを用意し、長い間仕えたのです。王は心に妙法を持っていたので懈倦することなく、その結果、妙法を得て成仏することができたのです。その時の王とは私で、仙人とは提婆達多であり、提婆達多を善知識として受け入れられたことにより仏と成り、人々を教化することができたのです」とあります。

ここで矛盾する記載があります。心に妙法があったというのに、妙法を求めたというのはおかしい話です。しかし実はこのことが実修と実証、修行と悟りとは同じ期間であり、実修の初めから実証があり、実証の終わりにも実修があることを示しているのです。弟子は妙法をもって仕え、師は妙法をもって教授するのです。弟子は師によって、師は弟子によって成仏することを表されているのです。

天台大師は『摩訶止観』に「提婆達多邪見即正。若諸惡中一向是惡（以下省略）」、「一向に是れ惡である、邪見は即ち正である、惡中に道あり」とあります。これは提婆の行いを一向に惡と考えるならば、いつまでも凡夫のままで仏に成ることはできない。対して提婆達多の行いに仏道を見出し、邪見に正見を見るならば、仏と成ることができるとする天台大師の所見です。『摩訶止観』は妙の一字を根源とする開会によって貫かれている著作であり、天台大師の本迹二十妙は邪正の相即、因果の俱時を説き、即身成仏を開出した教えであります。日蓮聖人はこの「提婆達多邪見即正」を「善知識」というお言葉で受け止められています。

この善知識は『摩訶止観』に三種の善知識が説かれています。私には「摩訶止観」全体を通して、四種の善知識が説かれていると推知されます。一に外護の善知識、二に同行の善知識、三に教授の善知識があり。外護はその人を助け護ってくれる人、同行は共に修行をする人、教授は教え導いてくれる人で、これらは順縁の善知識とされ、さらに深くこれを考究すると第四に逆縁の善知識とみなされるものが存在します。これこそが聖人が仏に成るための善知識とされたものです。日蓮聖人



は「三三蔵祈雨事」に、

仏になるみちは善知識にはすぎず。（「三三蔵祈雨事」定遺1065頁）

また「種種御振舞御書」には、

相模守殿こそ善知識よ。平左衛門こそ提婆達多よ。（略）釈迦如来の御ためには提婆達多こそ第一の善知識なれ。今の世間を見るに、人をよくなす（成）ものはかたうど（方人）よりも強敵が人をばよくなしけるなり。（「種種御振舞御書」定遺971頁）

と教えられて、順縁の善知識よりもむしろ、自分に敵対する者、苦しめ悩ます者が逆縁の善知識となり、自らを教え導くとの見解に立られています（敵対種の開会とも云う）。これは法華経の修行の根幹でもあり、常不軽菩薩が、

所見の人において仏身を見る（「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」定遺706頁）

というのも、自分に敵対する人、自分を苦しめる人に対して仏身を見るということであり、提婆品の師弟の互為主伴を教化の場に移した事の行法であります。

釈尊の因行とは煩惱即菩提・生死即涅槃の妙法の実修であり、釈尊の果徳は菩提即煩惱・涅槃即生死の妙法の実証にあります。この因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に全て収められています。なぜなら妙法は、「三道即三徳」（「始聞仏乗義」定遺1453頁）となす成仏の法だからです。この教理により五百億塵点劫の初め、釈尊と弟子は互為主伴となり、同体ともなります。弟子を師とし、悪道に学ぶ妙法によって、全ての衆生が即身成仏できることを、五百億塵点劫の初めの久遠実成によって教えられたのです。釈尊は久遠実成し、弟子もまた久遠の弟子である地涌の菩薩となります。この師と弟子が互具することから、十界互具の仏、十界互具の菩薩とされます。日蓮聖人は十界互具の仏こそ久遠実成の仏であり【九界を隔絶した仏（厭離断九の仏）は仏ではあり得ないと、妙楽大師の言葉を引かれています（「始聞仏乗義」定遺1454頁）】、十界互具の菩薩を地涌の菩薩と呼ばれています。五百億塵点劫の初めの一点より、釈尊の法身、報身、応身の三身は過去に遡り、未来に延

申し全ての時点において無始無終となるのです。

この事から「如来寿量品（仏のいのちとはどのようなものか）」と表徴されたのです。